

人間のように**考え、学ぶ**“次世代のAI”

# 「AGI(汎用人工知能)」の あらましとその影響

生成AIが生活や業務に実装されつつあるなか、人間のような汎用的な知能を持つAI「汎用人工知能：AGI (Artificial General Intelligence)」が注目されています。そのあらましと、仕事や働き方への影響を解説します。

※本稿は、5月29日時点での情報に基づいています。

ソニーフィナンシャルグループ株式会社  
テクノロジーセンター セネラルマネジャー  
Corporate Distinguished Engineer

豊島 顕



## AGI(汎用人工知能)とは？

近年、人工知能(AI)は驚異的な進化を遂げ、私たちの生活に深く浸透しています。特に、人間と自然な会話ができる「Chat GPT」の登場は、AIの可能性を世界に示し、「AGI(汎用人工知能)」という言葉が、未来を語るうえで欠かせないキーワードとなりました。

AGIは、一般的に「人間と同等の知的能力を持つAI」と定義されます。特定の作業に特化した現在のAI(特化型AI)とは異なり、人間のように幅広い分野で考え、学び、応用できるAIを指します。たとえば、特化型AIは予測分析や画像認識等の分野で活躍していますが、状況の変化に柔軟に対応することはできません。一方、AGIは、ビジネス戦略の立案や高度な研究開発といっ

た、より複雑で柔軟な対応が求められる知的作業においても、人間と同等の能力を発揮することが期待されています。

しかし、AGIの定義はまだまだ明確ではなく、実現時期についてもさまざまな意見があります。「知能」という概念自体が非常に複雑で、人によって捉え方が異なるため、AGI実現に向けた研究は「ゴールが遠ざかるマラソン」と形容されることもあります。

本稿では、こうしたAGIの特徴と、仕事や働き方に与える影響等について解説していきます。

## AGIはいつ誕生するのか？

米国の投資会社であるARK Investment Managementが発表したレポート「Big Ideas 2024」によると、AGI誕生に関する専門家の予測は、2019年以前には「80年後」とされていたが、2020年には「34年後」、2023年にはわずか「8年後」へと劇的に短縮されています。

この予測の加速を裏付けるように、著名人からもAGI到来に関する発言が相次いでいます。Chat GPTの開発元である

OpenAIのCEO、サム・アルトマン氏は、AGIの登場を大胆に2025年と予測しています。また、半導体メーカーNVIDIAのCEO、ジェンスン・ファン氏は、「AGIは5年以内に達成される」と断言しています。

一方、Google DeepMindのCEOで、ノーベル賞受賞者でもあるデミス・ハサビス氏は、「現在の生成AIモデルはAGIへの重要なステップだが、それだけではAGIには到達できない。さらにいくつかの大きな技術的ブレークスルーが必要だ」と述べています。

筆者も、ハサビス氏の慎重な意見に共感しますが、技術の進歩には予測不可能な側面もあります。いつAGIが登場してもよいように、私たちはいまから準備を始めるべきでしょう。

そのためにはまず、従来型AIとAGIの違いを正確に理解することが大切です(図表1)。

## AGIの本質

### 汎用性よりも自律性・柔軟性に注目する

AGIは日本語で「汎用人工知能」と訳されますが、この名称だけではAGIの本質を十分に伝えられていないと感じます。現在の

図表1 特化型AI(現在のAI)とAGI(汎用人工知能)の違い

特徴	特化型AI	AGI
主な目的	特定タスクの実行・効率化	人間と同等の広範な知的タスクの実行
能力範囲	限定的 (学習データ・設計範囲内)	広範・汎用的 (未知の課題にも対応)
自律性	低い (指示や事前定義が必要)	高い (自ら学習・行動)
柔軟性	低い (想定外の状況への対応が困難)	高い (状況変化に適応)
具体例	予測分析AI、画像認識AI、生成AI	現時点では存在しない

生成AIもすでに文章作成、翻訳、プログラミングなど、多様なタスクをこなす汎用性を備えています。今後は画像や動画など、さまざまな情報を扱えるマルチモーダルAIへと進化し、さらに複雑なタスクを実行できるようになるでしょう。

しかし、「いろいろな業務に使える」という汎用性だけでAGIが達成されたと考えるのは早計です。AGIの本質は、単に多くのことができるだけでなく「自律性・柔軟性」にあると考えます。

AGIの対義語として挙げられる特化型AIは、あらかじめ学習したデータに基づいて、特定の範囲内でしかタスクを実行できません。現在の生成AIも自然な文章を生成できますが、その知識は学習データに限定されており、特化型AIの一種と言えます。

一方、AGIは自律性を持ち、学習データにない未知の課題に対しても柔軟に対応できる能力を持っています。

この違いをわかりやすくするために、エンジニアの間でよく用いられる「ドラえもん」の例え話をしてみます。

AGIは別名「強いAI」とも呼ばれますが、ドラえもんはまさにその理想像です。のび太くんのお腹を覗き、明確な指示がなくとも自ら考えて行動し、その結果から学習していきます。

一方、ドラえもんの「ひみつ道具」は、特定の課題に対して驚くべき効果を発揮しますが、それ以外の用途には使えません。これらは「弱いAI」とも呼ばれる特化型AIに相当します。

このように、「自律性・柔軟性」という視点からAGIを捉え直すことで、その本質がより鮮明に見えてきます。

えてきます。

## AGIがもたらす仕事や働き方への影響 創造性とマネジメント

AGIの登場時期を予測するところが難しいように、その社会への影響を予測することも困難を極めます。一般的には、経済格差の拡大、倫理面や安全面でのリスクといった、ネガティブな側面に焦点が当てられがちです。

歴史を振り返ると、新しいテクノロジーの登場は期待よりも不安の声を増大させる傾向があります。たとえば、19世紀に鉄道が普及し始めた頃には、そのスピードや騒音、安全性に対する懸念が広まりました。「人間の体が列車の速度に耐えられない」「鉄道が通ると家畜が驚いて死んでしまう」といった心配の声もあつたそうです。AIも同じとまでは言いませんが、仮にAGIが登場したときにどのような向き合えばいいのか、冷静に考えてみる必要があります。

ここからは私見になりますが、たとえAGIが高度な自律性・柔軟性を獲得したとしても、決して超えられない壁があると考えています。それは、「目的を持つ」と

いうことです。

AIは私たち人間のように自ら課題を設定し、目指すべき目標を定めることはできません。どのような未来を描き、何を実現したいのかという「志」を持つことは、私たち人間にしかできない役割として残るはず です。

この役割について、近年注目されている、米国Cognition Labsが開発したAIソフトウェアエンジンニア「Devlin」を例に説明します。

DevlinはまだAGIとは呼べませんが、それでも自然な言葉で指示を出すと、優秀なアシスタントのようにプログラムコードの生成やバグの修正を行ってくれます。さらに、作成したプログラムのテストを実行し、その進捗状況まで報告してくれるのです。

しかし、ここで重要なのは、Devlinは「どのようなソフトウェアをつくりたいか(What/Want)」「なぜそれをつくる必要があるのか(Why)」といった、根源的な目的や価値判断を自ら導き出すことはできないという点です。

この点を踏まえると、仕事のあり方や働き方がどのように変化し



図表2 AGI時代のビジネスパーソンの役割変化

	Before:現在	After:AGI時代
焦点	How (どうやるか): 効率性・正確性	Why (なぜ)、What (何を): 方向づけ
主な活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓タスク実行 (定型業務・情報処理)</li> <li>✓論理的意意思決定 (データに基づく)</li> <li>✓ITツールの適切な利用・操作</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓目的設定・課題設定</li> <li>✓複雑なコミュニケーション・共感</li> <li>✓AIへの指示出し・マネジメント</li> <li>✓最終意思決定・倫理的判断</li> </ul>

ていくのが見えてきます。  
結論から言うと、「このタスクやプロジェクトで何を解決すべきか、何を達成したいのか」という、より本質的な問いに向き合うことが業務の中心になります。  
また、その課題解決に向けてAIを含むリソースを適切に配分し、幅広い見識を基にプロジェクトを牽引するリーダーの役割が重要になってきます。

言い換えれば、魅力的な青写真(目標・目的)を描き、それを実現するための広範な知識を持つ

「クリエイティブなジェネラリスト」が活躍する時代になると考えられます(図表2)。

そして、従来のAIは誰もが同じ性能を利用できましたが、生成AIの登場により、その性能は利用者の指示(プロンプト)の出し方に大きく左右されるようになりました。この傾向は、より高度なAGIにおいても同様であり、「利用者のスキルに依存する」私たちで進化していくでしょう。

したがって、企業の現状や目的を的確に把握し、AGIに最大限の能力を発揮してもらうためのAIマネジメントスキル(目的設定、指示、評価、軌道修正)が不可欠になると考えられます。

これは、現代において高く評価される「指示能力や目標設定能力に長けた管理職(マネジャー)」とほぼ同質の能力です。少し大胆な表現を使うなら、「全社員マネジャー時代」が到来するかもしれません。

## いまから準備できること 信頼と対人力へのフォーカス

最後に、AGI時代に向けて、いまからできることについてお話しします。



とよしま あきら ソニーフィナンシャルグループ株式会社。ソニーグループのトップエンジニア「Corporate Distinguished Engineer」に任命され、ソニーの技術の顔として活動中。著書に『中堅・中小企業のためのAI導入・活用の教科書(小社刊)』。

前提として、AIが進化するにより、定型的なレポート作成、単純な問合せ対応など、担当者によって結果に大きな差が出ず、人による付加価値が高くない業務はどんどん自動化されていきます。特に管理部門においては、イレギュラーが少なく、人間の感情に配慮する必要のない業務はAI化が加速するでしょう。

しかし、たとえAIが多くのタスクを代替するようになったとしても、その対価として報酬を受け取るのは人間です。

ただだけAIを活用しようとしても、効率的に質の高いサービスを提供すれば、結果としてお客様に喜ばれ、高い報酬を得ることができるのです。高速な鉄道を使ってハイスピードで輸送するのと、馬や飛脚を使って数日かけて物を届けるのでは、余程のことがない限り前者を選びます。

つまり、AGIと積極的に協業体制を築き、最適なサービスを設計できる企業・個人が、新たな価値を生み出すと考えます。そのために私たちがいまからできる準備は、大きく2つあります。

1つ目は、「信頼」という普遍的な価値を築き上げておくことで

す。AGIが登場すれば、多くの企業が少ないリソースで高品質なサービスを提供できるようになります。すると競争力の源泉は、目に見えるスペックなどの外形的な要素ではなく、外部からは判断しにくい「無形資産」へと移行します。信頼できる会社がAGIを活用したほうが、消費者としては安心して利用できるはずです。

2つ目は、AIが定型的な仕事を代替することで、これまで以上に「人対人」のコミュニケーションに時間を割けるようになります。共感力や気持ちを察する力といった、人間ならではの温かみのある業務の重要性が増していくでしょう。つまり、高い対人能力を持つ社員を多く抱える企業が、より多くの顧客やファンを獲得していくと考えられます。

これらの点を考慮すると、AIと真摯に向き合うことは、単なる業務効率化にとどまらず、企業経営や人間関係の本質を深く追求する機会を与えてくれます。

AGIによりデジタル化が一層進むことで人間関係が希薄になるのではなく、私はむしろ、より人に優しい世界が訪れるのではないかと期待しています。